森部信次

（令和四年八月号）

久米川ゆ分倍河原をへてゆかん時鳥鳴く化粧（けわい）坂まで

義貞が攻めのぼりたる皐月なり北鎌倉に老々男女

「営業中」木札の嬉し光泉ののれんをくぐり稲荷贖う

苔むせる鎌倉石のきざはしを踏みて仰げる浄智寺の門

木漏れ日の安藤寛の碑の際でじわじわ沁みる稲荷すし食む

茅葺の書院の庭の白雲木　三年ぶりの歌会はじまる

口笛を吹くかのごとき画眉鳥のさえずり聞こゆ歌会愉し

●作者の言葉

浄智寺歌会に参加したおりの一連です。湘南歌会は、毎年五月に鎌倉五山四位の浄智寺で歌会を開催しており、ぼくは晋樹さんにお誘いいただいて二〇一八年から参加しています。代表の八城スナホさんには時鳥が鳴く境内を案内いただき、やぐらの崖にひっそりと根を張るイワタバコを教えていただきました。

残念なことに一月に八城さんが亡くなられ、今年は寂しい歌会でした。七月には、イワタバコの紅紫の可憐な花が咲きます。八城さんを偲び、訪ねようと思います。

●選者の言葉

コロナ禍により三年ぶりに催された北鎌倉の名寺浄智寺での湘南歌会。森部信次氏とも三年ぶりの再会であった。四年前は峰尾碧さんも来られ、寺の高きにある澁澤龍彦や阿川弘之のお墓に詣でたことを思い出す。

五月のこの季節、お寺の奥に毎年みごとな白雲木の花を見ることができる。〈茅葺の書院の庭の白雲木　三年ぶりの歌会はじまる〉と氏は詠んでいる。

歌会を終え、会員が庭に出ると台湾リスが数匹現われ、木の芽を啄んでいた。北鎌倉の周辺では大ぶりの台湾リスが飛びまわっている。

今年は寺の近くに住んでいた八城スナホさんが居られない。

髙橋佳子（令和四年九月号）

中学の体育祭のプログラムこれで最後としみじみ見入る
こっそりと応援団の振り付けを練習している姿愛しき
太陽も応援をしているような体育祭の朝の青空
新緑の香り豊かなグランドに五つの色のハチマキ並ぶ
風薫る五月の空にはじけゆくマスク越しから響く声援
皆同じ体操服を着ていてもちゃんと見つかる我が子の背中
はりきって用具係の仕事するその一瞬にシャッターを切る
来年はそれぞれの道歩みゆくクラスメイトの繋ぎしバトン

●作者の言葉

黒岩剛仁先生、この度は年間選者賞に選んで頂き心より御礼申し上げます。新型コロナの混乱の中、六月の入学式から始まり制限や我慢の多かった息子の中学生活。最初で最後となった体育祭の観覧に、心躍らせ出掛けた日が昨日の事のように思い出されます。青空の下、マスクを付けながらも懸命に楽しんでいる瞬間を写真に収めるだけでなく三十一文字に込めた大切な思い出の一ページです。四月から高校生となった息子の成長を見守りながら、これからも短歌を詠み続けていきたいと思っております。

●選者の言葉

昨年七月号～本年六月号で私が特選に選ばせて頂いたのは、計四二人。複数回選んだのは、片山紫、片山佳代子、アダムス理恵、髙橋佳子、中川弘子、門田祥子の六名だった。しかしながら、複数回特選に選んだということは、たまたまの結果でもあるわけで、一年分の自らの選歌欄を今一度じっくりと読み返した。

最終的には、昨年九月号の、人種差別など深刻なテーマを歌ったアダムス作と、お子さんへの母親の愛情を詠んだ髙橋作という全く異なる世界のいずれかを選択することとなり、結果として向日的な髙橋作を年間選者賞とした。髙橋作は、本年五月号の、受験に向かうお子さんへのエールの一連もよかった。

年間選者賞（令和四年七月号～令和五年六月号）

本田一弘選

杉田伸江（令和五年一月号）

心なき言葉に幾度も傷ついてその分人に優しくなれり
真夜中にねずみに頭つつかれた何か大事な用だったのか
三年の連用日記ひもとけば衰えわかる筆力みても
カマキリがガラスと網戸の間でもがいてるそっとのがしぬ
初なりの茄子の二つを見にゆけり艶めく紺のたしかにありぬ
皺みたるりんごを見つつわが顔かとナイフを入れるも心はばかる
夕食のおかずも日記に書き込んで九十路のわれの一日が終わる

●作者の言葉

この度は本田一弘先生の年間賞に選んでいただき心より感謝致します。今我が家の近くは空家が殖え動物の棲処となりつつある。大きな家を作っても棲む人もいない。ある日家にある新しい物を寄付するため販売所に持参した。タクシーの運転手さんが「私も協力しますよ」と云ってメーターを切って下さった。世の中にはこんな方もいるのだと頭が下がった。私も残り少ない日々を幸い健康にも恵まれているので人のお役に立てたいと思っています。

●選者の言葉

杉田さんは九十路。長い人生経験がなければ歌えない世界があるということを実感した一連である。そこはかとなく漂うユーモアが何ともいえず味わい深い。杉田伸江さんというお名前も素敵だ。明るくすこやかなイメージの作品世界へと読者を誘う。

心ない言葉に幾度も傷ついてきたからこそ、人に優しくなれたという。人だけではない。ガラスと網戸の間でもがいているカマキリ、初なりの茄子、皺が寄ったりんご。どんなものにもあたたかいまなざしで見つめつつ接している。真夜中に自分の頭をつついたねずみには怒ることなく、「何か大事な用だったのか」とやさしく口語で問いかけた二首目の歌が一番好きである。杉田さんの益々の御健詠をお祈り申し上げる。

青木泰子（令和五年二月号）

いつまでもいつも青空カルフォルニアアボカド大樹がひきよせている夏

初秋に花がさいたよパパイヤのはじめてあなたに会った日の色

ユーカリのこまかな花が水底に沈んで汚す秋の噴水

本当におまえはいい顔しているよ真正面より見るトラ猫トラは

日の暮れる前には帰ろう帰りましょう駐車場はいつも爆破の予告

●作者の言葉

・いつまでもいつも青空カルフォルニアアボカド大樹がひきよせている夏

毎日毎日が青空の土地、カルフォルニア州のロングビーチ市に住んでいます。引越してきた家の庭にアボカド大樹がありましたが、葉っぱがプールを汚すので、思い切って切り倒しました。別の場所に植えたアボカドが四年目くらいから実をつけています。アボカドはサラダに入れる以外に、わさびとしょうゆでいただくと、まるで鮪の刺身の味がします。

●選者の言葉

歌歴が長く「心の花」でも先輩に当たる青木泰子さんの歌を、私は今まで幾度となく特選に選んできた。私にとっては「心の花」の注目歌人の筆頭の一人である。青木さんのアメリカ生活もまた長い。その間、楽しい事ばかりではなかったはずだが、作品はまさにカルフォルニアの光と風さながら「いつまでもいつも青空」である。決して恨みがましい愚痴を言わず、常に明日を見つめてからっと肯定的だ。これは並大抵のことではないと思う。その姿勢にふと、石川不二子の「身をせめて切なきことをわれは歌はぬ」を思い出したりもする。

アメリカのデトロイトに息子一家が暮らす私にとって、青木泰子さんの歌はまた、月一度の「アメリカ便り」でもある。

金有美（令和五年二月号）

飽くるまで撫でさせ欠伸ひとつして眠る兎のいのち清らか
雨の夕ながく黙して祈りゐる傍らにきて眠れるうさぎ
糸つむぐ業おもひをり秋の夜を兎の首の和毛ひきつつ
換毛などと人の呼びたる硬き音うさぎは雪をうみゆくなれど
手につつむちひさき耳のあたたかさ太く直ぐなる血の走りゐて
機音にも耳を寝かせて草を食み兎はひとの暮らしになじむ
冬窓に被毛ふくらむぎんいろのうさぎの髭を零るる光
白き兎たかく跳ねれば花の野はひろがりきたる冬の畳へ

●作者の言葉

徹夜あけの目に飛び込んだ年間選者賞の文字。葉書を手にとのに駆けより報告をしました。六歳でわが家にやって来たうさぎの兎野（とも）は、四月で九歳になりました。三月初めからずっと、酸素ケージの中にいます。今はもう部屋中に花を咲かせてもらうことは叶いませんが、三度の命の危機を乗り越え、そばにいます。昼夜ない看病の日々に思いがけないご褒美を頂き、一緒にがんばる力が湧いてきました。いつかまた花野に遊ぶ日がくると信じて…。

横山未来子先生、ありがとうございます。

●選者の言葉

金有美さんの作は、兎との生活をうたった一連。三首目と六首目を見ると〈われ〉は機織りをするようである。糸つむぎを連想させる「兎の首の和毛」の感触、機音にも慣れて「耳を寝かせて」草を食む様子など、兎がつねにしずかに傍らにいる気配が描かれる。四首目は、兎の抜け毛を「雪をうみゆく」と表現しており、〈われ〉が兎に感じている清らかさが伝わってくる。五首目の「太く直ぐなる血の走りゐて」からは、耳を包んでいる手のひらにこもる拍動とぬくもりが感じられるようだ。八首目は、兎が跳ね上がったその一点から、畳が「花の野」へとたちまち変わる幻想的な映像が見える。同じ命を持つものどうしの交歓が、心に残る作品だった。

加利川友子（令和五年四月号）

「よーいどん」の声をかけられ幼らは身につけてゆく競ふこころを

水色の帽子に黄色のパンツ履く園児らスタート位置より競ふ

園庭とは囲ひの中なりその中で幼はつけゆく人間臭を

冬ざれの庭の真中に柿ひとつ残れりひとつがゆゑに誇らし

制服は行き帰りの時のみも知る園前のカフェに一日をれば

ばつさりと枝を伐られし街路樹をダークグレーの空が包みぬ

●作者の言葉

この度は、佐佐木朋子先生の「年間選者賞」をいただき、ありがとうございます。

幼稚園前のカフェで過ごした昼前のこと。園庭では、それまで気ままに走っていた園児たちが一ヶ所に集められ、「かけっこ」が始まった。「よーいどん」の掛け声で、いっせいにゴールを目指す。「かけっこ」を通して、園児たちは、速く、滑らかに走ることを学んでいく。同時に、無邪気に「よーいどん」しながら、いつの間にか、優劣がつけられていく瞬間でもある。すっかり冷めたコーヒーを飲み席を立った。

●選者の言葉

加利川さんの歌歴は長い。そして長く職場の歌を詠んでこられた。「心の花」誌上で退職の歌を読んだとき、わたしは密かに次の歌のテーマがどうなるのかまつ思いでいた。

仕事は退いても視線というのは逸らすことができないのか、年少の者達に目が向いたようだ。しかも徹底さが増したらしい。いや、たまたまこの日の休憩時間が長かっただけかもしれないが、園前のカフェにいて集団教育の様を観察しているのである。

守られていることと、馴らされて行くこと、集団の中にいて個であり続けること。幼児たちが身につけてゆく社会性を人間臭と表現したのは、全否定も全肯定もできない複雑な思いからであろう。

加古陽

（令和五年五月号）

上へ上へ指をすべらせ時を掘る夕べあてなく小暗き森に
空言は度数の高いアルコール事実より強く酔わせてくれる
晴れわたる空から時に爆弾が落ちることありエゴサーチすれば
知らない人が名指しで「クズ」と呼んでいる　消してくれるよね
僕が消えたら
ミュートしてもミュートしてもなお湧いてくる　ぷーんぷーんと
五月蝿いフェイク
コロナにも慣れて興味も薄らいで感染症医のフォローを外す
半時もたてばグラスも缶も空　沈黙を聴こうスマホを閉じて

●作者の言葉

新聞記者だと知ってのことだろう、こんな話が出てるけど本当ですか？　と聞かれることがある。その中にフェイクニュースが混じることが増えたと感じる。たいていSNSの情報を真に受けた、もっともらしい嘘だ。知らない人からいきなり中傷されることもある。私自身、しばらく前に見知らぬ作家からツイッターで「クズ」呼ばわりされた。不正確な情報をもとにした誹謗だった。

今回の連作は、そんな体験を種火にして詠んでみた。年間選者賞に選んでいただけるのは望外の幸せで、深く感謝いたします。

●選者の言葉

加古陽さんは、新聞記者として長い経歴を持っている。そのためか、世相の変化に鋭敏に反応する感受性を持っていて、作品にはよくそれが発揮されている。国際的な政治問題であったり、あるいは歴史を遡っての検証であったり、今回の受賞作のように極めて今日的なテーマの一連など、例として挙げることができる。

スマホが日常生活に欠かせない道具になっている今、便利さの裏にある底知れない負の危険にも晒されることとなった。SNSでの偽情報網に絡め取られ、何が正確な情報か分からない不安感。このような日常を批評ではなく、ワガコトとして思索し、言語化し、短歌作品に仕上げる工夫をしている。受賞作とした理由である。